

# 「七夕」をめぐって

## 千葉 覚

「風物誌」を担当しているが、主に年中行事を取り上げている。現在一般に行なわれている行事の起源や変遷をみていくのである。

かつて文学作品に描かれた年中行事にはそれほど注意を払わず読み流していたが、近頃は丁寧にみていこうという気持が強い。もちろん行事自体に描写の主な目的があるのではなく、他の目的のための手段となっている場合が多いのであるが、それでも描写されている場面・人物・主題とどう拘わりを持つのか非常に興味深い。特に古典作品ではそうであるが、また行事そのものの形態もいかようになっていのかよく気にかかると。

『宇津保物語』の「藤原の君」の巻に、七夕の歌がみえる。源正頼一族が鴨川で遊び、歌会を催している一節だが、もちろん七月七日の日である。

そこに正頼の九の君「あて宮」を含めた姫君達や他の人々の歌がみえるがその内容を別にして、習俗の形をみていきたい。次に掲げるのはこの七夕遊宴の冒頭の部分である。

かくて、七月七日になりぬ。賀茂川に御髪すましに、大宮より始め奉りて、小君たちまで出テ給へり。賀茂の川邊に棧敷うちて、男君達おはしまさず。その日ノ節供、川原にまかれ

り。君達御髪すましはてて、御琴しらべて、七夕に奉り給ふほどに……

(日本古典大系本)

七夕の行事が中国の古い伝説、牽牛・織女の二星相会のご事にはじまることはいうまでもない。天の川をへだてた牽牛と織女の二つの星が年に一度七月七日の夜に逢うことを許されたので、この夜にあたり二星を祭ったのである。この本来の七夕の行事と裁縫の上達を祈る乞巧の儀式が日本の朝廷に伝わったのは七世紀頃(またはそれ以前)といわれ、日本的な習俗としてその日、文人が詩歌を詠むことになる。地上(都)の鴨川を天上の天の川とみな

してその川辺で遊宴を設ける習俗は容易に理解できる。さらに川辺に棧敷を設けての歌会と琴の演奏は、従来から見られる日本固有の習俗である。貴紳の邸宅だけでなく、このように鴨川の川辺での遊宴も平安朝にはみられた習俗なのであろう。

ところがここにさらにもう一つ興味深い習俗がみられる。姫君達の乞巧の儀式ではなく「御髪すまし」という禊を行うことである。管見に入った文学作品で七夕の日には鴨川で髪を洗い浄める習俗に出会ったことはない。「すまし」とは洗い浄めることなので単なる日常生活上の雑事と考えるのではなく、これも当時の七夕の習俗の一つとみてよいと思われる。

この習俗を考えるに、やはり折口信夫が述べるところの「水の女」をあげるべきであらう。

公の行事で鴨川での禊は「賀茂祭」における齋王の御禊、「大嘗会」での帝の御禊などにみられるが、『宇津保物語』にみえる私的な遊宴でも鴨川での禊の習俗は当時みられたのであろう。

折口信夫は、『日本書紀』にみえる「木花咲耶媛」と「磐長媛」をあげ「古代には遠来のまればと神を迎え申すとて、海岸に棚作りして特に擇ばれた処女が、機を織り乍ら待って居るのが祭りに先だつ儀礼であったと述べる。その儀礼が長く習慣化され、内容のない伝説化したものへ「外来の七夕の星神の信仰と結びついた」（折口信夫全集第十五巻）とみている。神聖な処女が吉事を期待して祓いをする日本古来の信仰が七夕にみられるというのである。

この『宇津保物語』の洗髪は、日本古来の信仰生活が現れたものとみてよい。このように中国伝来の星祭りの説話と乞巧奠、そして日本固有の棚機姫の信仰行事が結びついて発展し変容したものが現在の七夕の行事であると考えられる。七夕は禊の日である事も忘れてはいけない。

年中行事の探究の意義は種々に考えられるがまず我々の祖先を知ることである。どのような生活（風俗習慣）をし、どのような神を信仰し、どう文化を築いてきたかを

知ることである。それによって見失いがちな行事本来の姿を再認識する。さらにそのことによってよりよい将来への期待を持つことができるであらう。豊かな精神生活のためにも年中行事本来の意義を見失うことなく我々皆が子孫に伝えていきたいものである。

七夕に関連して塚本邦雄の小説『藤原定家・火宅玲瓏』の一節が浮かんでくる。歌人藤原定家を主人公に小説化した作品だがその一節で定家が娘香のために自邸で乞巧奠を修している。病気がちで虚弱な香のために宮中清涼殿の乞巧奠の様を手配させたのである。

これはあくまでも小説の話であるが、現代の父親もこの小説の定家のような気持ちを持つことが大切なのではないだろうか。雛祭りであらうと端午の節供であらうと七夕であらうと一家の主たる父親が積極的に行事に参加し、真の行事の姿と意義を子に伝えていく態度が必要なのではないか。それによって年中行事の本来の意義が保てるのではないかと思われる。